

学会印象記

国際エイズ会議の概要と日本からの参加報告

柏崎 正雄

Masao KASHIWAZAKI

財団法人エイズ予防財団 国際協力部 国際協力課 主任

巨大な国際エイズ会議

前年に神戸でアジア太平洋地域のエイズ会議 (ICAAP) が開催されたのも記憶に新しい 2006 年の 8 月、「国際エイズ会議」がカナダのトロント市で開催された。世界 170 カ国から 26,000 人の参加者を迎え、開催期間中のトロント市内はホテルやレストランだけでなく道端でも会議バッグをぶら下げた人々でごった返した。

開会式では、直前に世界エイズ・結核・マラリア対策基金 (世界基金) への 5 億ドルの寄付を発表したビルゲイツ財団のビル&メリンダ・ゲイツ氏、カナダ政府 (カナダ総督、保健大臣、オンタリオ州首相、トロント市長)、UNAIDS 事務局長らによるスピーチが行われ、初日からマスコミの注目を浴びた。

今年の会議テーマは、「Time to Deliver」(実現の時)。エイズが登場して 25 年が経ち、その間に開発された予防や治療のプログラムをもとに、世界的な政治的コミットメント、資源・財源の投入、関係機関の協力体制をより強化し、グローバルな対策を実行していくことが目的となった。会議は、「HIV の生物学・病因」、「臨床研究・治療・ケア」、「疫学と予防・予防研究」、「社会科学・行動科学・経済科学」、「政策」といった 5 つのトラックに分類され、4,500 にも及ぶ抄録からの発表を軸に進められた。

プログラムは、午前の枠に全体会 (プレナリー) が開催され、世界の最先端のトピックがわかりやすく紹介され、その後、夜の時間帯まで、口頭演題や示説演題によるセッション、シンポジウム、スキルズ・ビルディング・ワークショップなどが実施された。同時に、企業や国の展示ブースを抱えるエキシビションや、NGO のブース、各国の啓発プログラム、パフォーマンスなどが実演されるグローバル・ヴィレッジも別会場に設置され、参加者の交流を促進する場もたくさん用意されていた。

注目したトピック～予防技術～

巨大な国際会議の全貌を知るには、会議場で配布されるカンファレンス・ペーパーやインターネットに目を通したり、地元テレビ局のニュース番組を見たりするのも 1 つの方法

であるが、朝一番のプログラムであるプレナリーに参加するのが大変良い方法である。そこで概要を発表された各トピックが、その後の口頭演題やシンポジウムなどでさらに多角的に話し合われていくからである。4 日間のプレナリーで紹介されたトピックは非常に幅広く、病理学、疫学、人権、女性と少女、予防、予防技術、ワクチン、ハーム・リダクション (薬物使用におけるリスク軽減)、HAART の費用対効果、子ども、普遍的アクセス、法的役割、貧困と開発、市民社会、宗教、青少年といったものが挙げられる。

その中でわたしが特に印象に残ったトピックの 1 つは、「予防技術」である。現在、教育や検査、コンドーム、清潔な注射針といった予防方法は存在する。しかし、HIV 感染のリスクがある人で、それらの予防ツールにアクセスできる人たちは、5 分の 1 にも満たないのが現状である。そこで、「ワクチン」、「マイクロビサイド」、「男性器包皮切除」といったものが予防技術として紹介され話題になった。

長年期待されてきたワクチン開発については、実用化にはまだ 10 年はかかるとの見方があったり、特筆すべき候補薬の発見がなかったりするものの、細胞性免疫に関する治験が注目されていたりするなど、予防技術としても再注目する声が上がっていた。

男性器の包皮切除 (male circumcision) も予防技術の 1 つとして紹介され、ケニヤや南アフリカ共和国での臨床疫学研究から HIV の感染確率が 50~60% も減少するという発表もなされた。予防ツールにアクセスできない状況へのオルタナティブな手段として注目されていた。

そして、もっとも目立ったのが、女性主体の HIV 感染予防が期待されるマイクロビサイドについての発表が多かったことである。マイクロビサイドとは、膣内あるいは直腸内に用いる殺 HIV 剤である。ARV、侵入阻害といった種類も開発され治験が行われるなど、実用化をめざしているものである。知識やコンドームといった予防ツールが得られない状況や HIV 感染が防ぎきれない環境で生活している女性や少女をエンパワメントする観点からの開発が望まれる。使用方法や服薬指導の難しさ、副作用や費用面での課題なども残り、本当の意味で女性が主体的に使いたいと思える予防技術にまで到達できるかが、今後の課題だと感

じた。

日本からの参加（派遣事業の報告）

欧米やアフリカからの参加者が多かった印象を受ける今回の会議だったが、日本の研究者からも30を越える発表があった。事前に収集した情報を参考にすると、感染機序、免疫、薬剤耐性、ワクチン、迅速検査、妊婦擬陽性、青少年の予防教育、同性愛者の予防教育、血友病といった国内の対策に加え、分子疫学、結核教育、ART導入の影響などの海外の対策も盛り込まれていた。

エイズ予防財団では、諸外国との参加者との意見交換およびエイズに関する最新の知見を得ることにより、エイズ対策の広範な充実、活性化を図るために、隔年で開催する国際エイズ会議とアジア太平洋地域エイズ国際会議に、日本からの参加者に対する派遣事業を実施してきた。今年は、3月下旬より募集を開始し、基礎、臨床、疫学・予防、社会の分野から合計15名を派遣した。

各参加者は、免疫賦活、薬剤耐性、チーム医療、アドヒアランス、PWAの生活・権利・問題、母子感染予防、新薬、移民・人口移動、企業のCSR、職場とエイズ、ジェンダー、ユース、HIV検査、MSM、NGO評価、プログラム評価、薬害、血液感染といった多様な分野での会議参加を果たし、情報量の多い報告書により、すでに国内への還元を図っている。（注1）

また、会議期間中には、エイズ予防財団のブースでの協力や有志による食事会などを通じ、国内では常に多忙を極める参加者どうしが、分野を越えて情報交換や交流の機会をもつことができたことも良い経験となった。



センスの良いデザインと若者の熱心さが印象的だった「ユース・パビリオン」

日本からの参加（グローバル・ヴィレッジでのブース出展の報告）

最近の国際エイズ会議では、科学プログラムよりもコミュニティ・プログラムの規模が拡大してきている。その理由として、科学プログラムは他の時期にも学会会議が開催されているためとも考えられるが、コミュニティ（＝エイズに影響を受ける人たち）が国際エイズ会議を意見交換やネットワークの貴重な機会として位置づけているからとも考えられる。

コミュニティ・プログラムといっても実に多様で、HIV予防教育のパフォーマンスやデモ行進（今回は、開発途上国の保健労働者の権利についての抗議が目立った）といったものから、ドキュメンタリーなどの映像を上映するビデオ・ラウンジ、NGOや小さい団体が交流したり、HIVの収入向上プロジェクトを実施したりする「NGO & 市場ブース」などが設置されていた。コミュニティ・プログラムの中で特に印象を受けたのは、ACCESS・LISTEN・MONEY・SEX・TRUTHという5つのキーワードをセンス良くデザインした「ユース・パビリオン」だった。積極的にコミットメント宣言を集めるキャンペーンを実施しながら、そのブース内で熱心に話し合いをしていた若者の姿に感銘を受けた。

エイズ予防財団では、「NGO & 市場ブース」にブースを出展し、資料と会話を通じて日本の情報を発信した。国内のHIVの感染状況やエイズ対策をまとめたパワーポイント資料、歴代のキャンペーンポスターを展示し、今年新しく製作した滞日外国人向けパンフレット（英語、タイ語、スペイン語、ポルトガル語）、厚生労働省のHIV予防と検査のガイドライン英語版（Selected Guidelines for HIV Pre-



「NGO & 市場ブース」でのエイズ予防財団のブース風景

vention and Testing using Rapid Tests), NGO に提供していただいたポストカードやパンフレットなど合計 2,000 部以上の資料を無料配布し、レッドリボンバッジなどの販売も行った。

ブース出展では大きな発見が 2 つあった。数多くの参加者やトロント市民と会話する中で、「日本の情報がずっと欲しかった」と言われたり、「なぜ日本では HIV 感染者数が少ないのか?」、「日本の性文化はどうなっているのか?」、「感染経路はどのようなものがあるのか?」といった基本的な質問を多くされたことが印象に残った。日本のエイズ対策の情報が世界レベルではまだまだ知られていないことを知り、今後は日本の実情を正しく説明できるよう尽力していく必要があると痛感した。また、マンガを用いたパンフレットや MSM 向けのパンフレット、子どもや女性の絵の入ったポスターに人気集中し、日本の NGO のクオリティに対する評価が高いことを知り、日本の NGO が国際協力に貢献できるポテンシャルを再認識することができた。

今後の国際エイズ会議への参加

次回の国際エイズ会議 (<http://www.aids2008.org>) は、2008 年 8 月 3 日～8 日にメキシコ市で開催される予定である。その前に、今年にはアジア太平洋地域エイズ国際会議が、8 月 19 日～23 日にスリランカのコロンボ市で開催される。

これまでの貴重な体験を通じ、国際的なエイズ会議は学びと相互支援の場だと思っている。今回の会議参加の経験を通じて別の視点から日本のことを考えることができたが、今後の国内のプログラムに還元していくとともに、国際会議において日本の情報を発信していくよう今から準備していきたいと思う。

(注 1)

(財)エイズ予防財団ホームページ <http://api-net.jfap.or.jp/> の「イベント・研修情報」から「エイズ関連学会情報」に進み、「第 16 回国際エイズ会議 (トロント)」をご参照ください。